

戻る

第四章

職場を去って  
思うこと



## 何かが見えてきた

退院以来、われながらまじめに苦しいリハビリを続けてきたものだと思う。これを支えてきたものは、「職場に復帰したい」という一念だったということは、すでに何度もお話してきたとおりである。しかし、復職が絶望となったところから、私の中に微妙な変化が起こってきたようだった。

私が、この発病から闘病の日々を記録しようと思いい立ち、ワープロを打ち始めたころ、その一部を読んだ妻や娘は、「パパは格好すぎる」と思ったという。他の人からも「お偉かったんですね」と、いささかの揶揄を感じさせる口調で言われたこともあった。

私としては、少しも自分を美化するつもりなどなく、ありのままの姿を記してきたと思っているが、回復を願い、復職を大目標にするあまり、われとわが身を叱咤激励する意味での表現が多くなっていたかもしれない。

また、「弱音」を吐いたら——たとえそれが紙の上にも——自分が崩れそうな気がしたことも確かだし、いつかこの記録を同病の人に読んでもらえたとき、傷をなめ合うような類のものにはしたくない、応援歌になって欲しいという思いもあった。

しかし、退職もきまり、リハビリにも何度かの挫折を経験すると、次第に自分でもわからなかった自分の姿が見え始めてきたのではないだろうか。ここでは、そんな私の心の動きをふり返ってみたい。

### 死を思った日々

私は元気なころ、たとえ健康診断で多少の注意をされても、また家族が私の体を気づかっても、自分の健康に対する過信から、「俺はだいじょうぶだよ」とかまわずに走りつづけていた。

そして昭和六十年の秋、気がつくくと、私は病院のベッドに右半身マヒのために動かない体を、丸太のようにゴロンと横たえて呆然としていたのだった。しかし、少しよくなると、今度は病院のベッドで寝ていても、「病気が治ったら、少々不自由でも毎日会社に行って、昔のように仕事をしよう」としか考えつかなかったのである。

だから、会社人間として生きること以外知らなかった私が、入院五カ月目にして支社長を解任され、東京転勤の辞令を手にしたときには、うねりのように襲ってくる悲観主義を抑えることができなかった。札幌であれば、職場も近いし交通の便もよかったから、職場に復帰する可能性はあったが、東京では通勤事情一つをとっても、復帰することは至難のことで、結局復職は不可能で、退職への道が見えてきたからである。

収入を失っても、一家の主人としての責任が果たせるだろうか。健康をなくし行動の自由を失った私は、家族のお荷物にしかならないのではなからうか。職場を失った自分の将来なんて私には考えら

れなかった。そのために、この転勤辞令は私に大きなショックと淋しさを与えたのであった。  
ここに、そのときの空しい沈痛な心を反映したメモが一枚だけ残っている。そのメモには死にたいという願望が首を持ち上げていて、だれにも知られずに死ぬ方法、妻からも子供からも疑われない自殺の方法を考えたり、介護に疲れ果てた妻が病に倒れ、家庭が崩壊するのではないかとという恐怖の予感を記したりしている。

ケース一 雪山に冬の風景を撮りに愛用のカメラを持って行った

しかし 不幸にして道路から滑り落ちて氷の斜面を転がった  
彼の肉体は雪に深く埋もれて春まで静かに眠った

白い雪が彼の肉体をきれいにおおっていた

ケース二 私はフェリーボートに一人で乗っていた

夕日はきれいだった その写真を撮る私は忙しかった

しかし だれ一人としてその写真を見ることはできなかった

夕日は 海に落ちた私に何もいわなかった

ケース三 私は草の上に座り おだやかにつぶやいた「疲れた」

病は重かった 腕も足もうまく動かなかった

妻はどこに行っただろう？ 死んだの？ 離婚したの？

なぜ？ 私の障害が温かい家庭に大きな影を落としている

暗い雰囲気 甲高い悲鳴 肉体的苦痛そして……（六一・三）

### そのとき妻は

入院中の二月の寒い日でした。付添いの方をお願いして、朝家に帰るとき、前夜の大雪で市電も動いていませんでした。私は細く雪よけされた歩道を九条のマンションまで歩いて帰りました。朝日に雪の面が光ってまばゆいばかりです。途中、プリンスホテルの前まで来たとき、粉雪が急に降り、その一粒一粒に朝の光が当たって、まるでガラスの粉を全身に振りかけられているような光景に出会いました。

「虚空に花降り音楽聞こえ」とは、こんなことかと思うほどに、天から降り来る、きらきら輝いた美しい雪の中にいますと、どこか別の世界に迷い込んだような気がして、しばし時を忘れました。虹みたいな七色の帯が見えていたように思います。美しく忘れえぬ光景でした。

この日の夕方、病院へ戻り、なんとなく沈んでいた夫の気を引き立たせようと思って、このことを話しました。

「僕も見だよ」

と一言。でも、それについては何も申しませんでした。いま思えば、きっとこの光景を病院の窓から見ながら、夫は死を思ったのでしょう。東京転勤のこともきまり、動かない手足に泣いた、ほんとうに苦しいときでしたから。

#### 復職を断念する

「東京本社人事部付」という辞令に従い、六十一年三月末、妻に付き添ってもらって、本社に出頭した。昔の上司は「ゆっくり養生しろよ」と励ましてくれるし、とりあえず医務室で治療の方針を相談したりして、まだ復職する夢は捨てきれなかった。しかし、会社の定年延長規定の健康条項に触れる限り、私が会社に無理に職場復帰をお願いしても、それはおいそれと承知してもらえないような簡単なことではなかった。内心はどんな職場でも毎日自分が仕事をしているという実感が得られたら満足でよかったのだが、私の年齢と健康状態を考えると、会社に申し出ることもできにくかった。

いずれにせよ、どんなお願いをするにしても、私が完全に健康体であることを示す必要があったので、私は通勤の訓練を兼ねて毎月、横浜の自宅から日比谷の本社まで出かけて健康状態をチェックしながら、回復した健康体をみんなに見てもらおうと思っていた。

ところが七月のことである。例月のように主治医の塩田先生の休業診断書を持って、本社に行った

とき、医務室の入り口でバツタリ、一人の旧知と出会った。そして思わず自分の目を疑ったのである。彼は私よりも五年くらい年も若く、常にはつらつとしていたのであるが、そこにいたのは、暗く陰鬱な表情でうつむいている、全く別人のような姿であった。

「あー、君はー、確か？」

私の問いかけに暗い顔をゆつくりと上げた彼は、

「やー、森山さんですか。えらい病気をしました」

「なんの病気なの」

「よくわからないのですがね、メニエール病だろうかと言われています」

「そうですか、大変ですね、どうかお大事に」

簡単な挨拶を後に私は帰途についた。

帰りの電車の中で、私はしきりに彼のことを考えた。彼が南国宮崎の強烈な夏の日差しの下で、丸顔にいっぱい汗をかきながら、「わー、暑いですわー、どうですかー」と、朗らかな声で挨拶していた姿や、「森山さん、ちょっと話が」とやってきたときの陽気で人なつっこい表情が浮かぶ。「あの彼が、なぜ？」私の心は複雑に揺れ動いた。

やがて電車の窓から、懐かしい品川の風景が見えてきた。そこには、昭和五十五年、札幌に行くまでの数年を過ごしたエンジンアリング部門の事務所があった。しかし、懐かしさが込み上げるとともに、当時のすさまじいストレスの数々が記憶の底からよみがえってきた。

札幌にいる間は忘れていたが、こうして目の前を見ると、職場の仲間との楽しい思い出とともに、困難な仕事につきものの数々の失敗の苦しい思い出や、その失敗が私に与えた激しい苦悩が一気によみがえり、嘔き上がってきた。「つらかったな、あのころは」私は傍らの妻に話し続けた。

その日、家に帰りついて、私にはメニエール病のために足がなかなか進まず、そろりそろりと歩いてきた彼の後ろ姿が頭の中から消えなかった。そこには他人の姿ではなく「自身の姿」が鏡に映し出されたように見えた。私より若いにもかかわらず、彼の姿はすでに老人のそれであった。車窓から見えた事務所のたたずまいは、これまで妻にも話せなかった仕事の苦しみやくやしきなどを、再び思い出させた。

その日を境に、職場に復帰したいという私の希望は、急速に減少していったのである。

### 残りの「いのち」を考える

そのうちに、親しい人とは話ができても、知らない人の中では緊張からか、一つ一つ言葉を探さないと簡単な挨拶もできない自分を発見した。舌がもつれてしまうのである。

「とても人前で仕事をするレベルじゃない」

そんな不完全な私の姿が見えてきた。一つ一つの機能はよくなっていつていつているが、私の全体を見ると仕事に取り組むには時間がかかりそうだと判断したのである。

塩田先生は熱心に「復職はどうするつもりか」と、月に一度の診察日に、私の心を揺り動かそうと励

ましてくださった。だが、私の心にはそろりそろりと歩く彼の後ろ姿が消えては浮かび上がってくるし、今まで一度たりとも口にしたことのない失敬のつらい思い出がよみがえり、私の気持ちを抑えつけるようになっていた。そのつど、「先生、自信がないんです。通勤の電車で会社まで行く自信がありません」と答えていた。

そのころ、自分の心の奥深くに、一人の平凡な父親の顔が頭をもたげ、父親の切ない願いが渦巻いているのに気がついた。それは、娘が順調に人生を歩み、適齢になれば人並みに結婚して欲しいという、ほんとうに平凡な父親の願いだったのである。

退院して一年がたち、職場に復帰するめども立たないまま、六十二年三月には、ついに休職の期間も満了の日を迎えた。人事部長は私に退職金の受取りを勧めてくれた。

しかし、娘が結婚相手を探すときに、肩書がなくなった父親の私を先方に説明するのは、きつと大変だろうなと思うと、社会的な立場を示す肩書が欲しかった。

そこで、「どんな格好でもいいからしばらく会社に籍を残してください」と頼み込んで、無理に私は六十歳まで常勤嘱託ということにしてみた。現在の日本では、その人の肩書が最も簡単な「経歴証明書」だからである。そのとき、私はまだ自分の価値観を一八〇度変えることができなかつただけでなく、娘を思い、世間をおもんばかると、会社を捨てることができなかつたのである。

しかし、そのころから私の生命があるうちにやらねばならぬことはなんだろうか、ということに私

の関心が変わっていったことも事実であった。もう若くない私が、残された人生で何をしておかねばならないのか。いっしょに人生を歩いてきた妻や娘の将来のために、私が元気な間に何がしてやれるだろうか。お世話になった親しい友人にどんな感謝をしていけばいいのか。限られた少ない日々の生き方をどうすればいいのか、ということである。今までのように、自分が社会的な活動の舞台を欲しがるのでなくて、その前に解決すべき課題があるのではないかと気がついてきたのである。

#### 田宮虎彦氏の死に思う

昭和六十三年の春のことであった。夕刊を広げて驚いたことに、作家の田宮虎彦氏がみずからの命を絶ったという記事が出ていた。私の青春時代は、何もない暗い時代であったが、そんな時代に純愛のほのかな明るさを書いた田宮虎彦の著書は私の数少ない蔵書の一冊であった。それだけにその田宮氏の自殺という新聞の報道は、私に大きな衝撃を与えたのである。理由はそれだけでなく、氏が私と同じ脳梗塞をわずらっていたということもあった。新聞によると、氏は脳梗塞の後に残るマヒに苦しみながら、「不自由な手足をかかえて作家としての復活を熱望していた」とのことである。このことは、マヒの体で社会活動に戻りたいと願いながら、リハビリに過ごす私には強いショックだった。

氏の自殺は、脳梗塞のあとの頑固なマヒがある以上、社会に復帰はできないということを示すのだろうか。それともリハビリというものが、複雑で、簡単にはいかないということを教えるものなのだろうか。あるいは、氏の場合には、作家としての人生以外に生きる望みがなくて、それが氏を自殺に

追いやったのであろうか。いずれにせよ、他人の心の奥深いところは、外から見ただけでわかるものではないから、黙って静かに氏のご冥福を祈るしかない。

しかし、同時に、もし私が再び社会活動に戻れなかったらどうするんだと、私に回答を求めてきたような気がした。私には田宮虎彦氏の自殺が他人事とは思えなかったのである。これは、全く私自身の問題なのだ。

そんなときに、たまたま海外で活躍していた女性ジャーナリストの千葉敦子さんが、がんと最後まで壮絶に闘いながら、ついに亡くなったという記事が新聞にのった。「がんの告知」を受けて、そのがんと最後まで闘ったということは、千葉さんに気力が満ちていたからだろうと思う。きっと彼女には、「かけがえのない大事な人生を精いっぱい生きる」という態度が基本にあったのではないかと推測してみた。

このお二人の生きざまが、私には「お前の生き方を改めて見詰めてみる」と聞こえたのである。

「志郎よ、お前はどちらの道を選ぶのか」

これは、私の心を鍛える大きな事件となり、あるときは田宮氏の足跡を追うしかないと思の底から思ったり、千葉さんが最後まで力をふり絞って闘ったように、私も力の限り生きたいと願ったり、お二人の生きざまの間を振り子のように揺れていた。

しかし、いずれにしても、人生の果てには死があるという、しごく当然のことをお二人の死によって教えられたのである。そんなあたりまえのことを考えずに走っていた私の愚かさが見えてきた。い

ろいろな問題が雲のようにわき上がってくるが、私は、まず再発の危険のある体質を健康な体質に改め、リハビリの成果で、ある程度の行動の自由を手に入れた上で、新しい一步を踏み出したいと思っていた。

しかし、これは当時、私自身にまだまだ、障害者として生きる覚悟までできていなかったということだった。リハビリはもちろん大事なことはあるが、その成果が上がらなくても歩きたすことが、実は大切だったのである。

### そのとき妻は

ほのぼのの会に通うころ、保健婦さんから「家族の会をつくりたいので協力いただけますか」と問われ、「私もぜひ入れてください」とお返事しました。

ところがその後、いつになってもお呼びがないので、どうしたのかかしらと思い、尋ねましたら、「その保健婦さんは転勤なさいましたよ」と。とても熱心にこの問題に取り組んでいらしたので、頼りにしていましただけに残念に思いました。

「家族の会」は実現しませんでした。ほのぼのの会の例会などに、夫を介護して出席しているうち、自然に寄り合うように親しくなった方々があり

ます。何度かお目にかかって気持ちが悪く感じましたところから、当時の苦しかった思いをお互いに語り合うようになりました。

私は、夫が「足が痛い」とはっきりした症状があったのに、「大事に至る」とは考えなかつたうかつさを話しました。ある方は「頭痛がして困ったのでそのつど売薬を飲んでいたので」と。また、ある方は「おまんじゅうを食べようとしたらポロリと取り落としてしまったけど」、「ときどき、舌がもつれたようになったことがあつたけどすぐ治ったから」など。いま考えればそれが前駆症状であつたかもしれないと思えるお話がありました。

でも、夫が入院してから、主治医の先生に「発病一年前に視覚異常がありました。そのとき治療すればよかつたのでしょうか」と尋ねましたが、「それは違うでしょう」とのことでした。でも、お話を伺うと、夫と同じような経験をお持ちの方もありました。

さらに「信頼しておまかせできると思って運び込んだ病院だけど、休日だったのですぐに治療してもらえなかつた。救急車だと、評判の悪い病院に運ばれるのだけど、そのほうがよかつたのかしら？」と悔やむ方。

「急いで総合病院に運び込んだのだけど、内科をはじめ各科を回され、ようやく脳外科で診断がついたときには、もうマヒが来ていた」と嘆く方。

## 新しい森山志郎の誕生

昭和という長い時代が終わり、平成という新しい時代に入ったばかりのとき、誘われて伊豆半島の旅に出かけた。

伊豆から仰ぎ見る富士山は美しい。蓮着寺ではすばらしい椿の森に誘われて、とうてい無理だと思つた山道をみんなに励まされながら歩いた。目の前いっぱい広がる太平洋が、岸に白い波を立てているのを見て、「海は広いな、大きいな」と子供の歌を口ずさみ、富士の白い雪化粧を望んでは「富士の白雪のーえ」とのどかな歌に打ち興じたのであった。

しかし、この歌う姿と裏腹に、私の心の中では二人の私が格闘していた。

「お前は一体どうするつもりか」

「どうするかといって歩き続ける以外に選ぶ余地はない」

「でも目標には少しも近づいていないぞ」

「なに、そんなことがあるもんか」

そのころ私は、富士山を目指して歩く姿を自分の姿に重ね合わせて、一步一步と歩き続ければ、ど

自分で車を運転していておかしくなり、そのまま入院されたのに、重度のマヒになった患者さんの家族は、「初期に入院したのにこんなに悪くなつたのは、適当な処置をしていただかなかつたか、よい薬を使ってもらわなかつたのではないか」と、医療に不信の声を上げていました。

いずれも、初期の治療に対する、後悔、不信が主なものですが、こんなことはだれにも話したくなく、ひとり悶々と悩んでいたものなのです。

お互いに話し、お互いに聞いておりますうちに、みんな同じような苦しみ味わい悩んでいたのだという連帯感が生まれ、少し気持ちも楽になりました。

今もおつきあいしておりますが、お互いに、もう何年も胸の中にあつた、当時の苦しい思い出を少しずつ互いに語り合いながら、「今までだれにも話せなかつたのよ」と、心の重荷を下ろします。

後悔ばかりしていたのでは、何も得られない私たちの毎日です。

「再発しないように心がけながら、積極的に前を見ることにしましょう。何かあつたら声をかけてね」とお互いに励まし合ふのです。



んなに遠い目標であろうとも、いつの日かきつと行きつくと思っていたのである。

### 回復の歩みは遅い

ところが日がたつにつれて首をかしげることがふえてきたのである。たとえば、ビクともしなかった指が動いたときには、肩も腕も肘も手首も指も、腕全部の機能が元どおりになる日は近いと狂喜したもののだが、次の進歩はなかなか来なかった。

歌らしき声が出てきたときも、すぐに昔の声がよみがえると確信したが、謡曲を謡おうとしても声は出なかった。

杖をはずして歩けるようになった私は、もうすぐどこなところにも歩いていけるだろうと思っていたが、いつになっても筋肉が疲労を訴え、長く歩くことはむずかしい。

左手の助けを借りて写経ができて、右手だけで字を書くことなど思いもよらないのだ。

つまり階段を一段は登ったものの、次の階段が見えない。そこはなだらかな高原なのだろうか、頭の上に岩が張り出していて登るのを拒否する岩壁なのだろうか、少しの進歩も見られない日が長く続いていたのである。何かで「道が開けた！」と喜んで、その道は行き止まりの道でしかなかった。

こんな失意の体験が重なって、いつのころからか、富士山に向かって歩いていく私自身の姿が、小さく小さく蟻の大きさほどになっているように思えたのである。片マヒで失われた手足の力が回復する喜びは大きい、その物差しは、健康な時代には想像もできなかったほどの微量な変化に過ぎない。

傍らから見えてわかるほどの変化にはなりにくいのである。ここで初めて片マヒの回復とはそんな生やさしい仕事ではないと知らされたのだった。

富士山の 頂を目指し 毎日歩く 今日も明日も

もうすぐ届くと思っても 私はなかなか 届かない

なぜだろう 気がついて よくみると

私の体は いつしか 小さく小さく

蟻の大きさに 変身しているのを知ったのだ

行けども行けども、歩いて歩いても、遠く高くそびえている目標は少しも近づいてこない。でもこの蟻は、たとえ登頂に成功しなくても、富士山の頂に登る夢を見ながら努力を続け、昨日よりは今日、今日よりは明日と、目標に少しでも近づいたという自己満足の中に生涯を終わるのだろうか。

昔読んだことがあるカフカの『変身』は、私には縁の遠い物語の世界と想っていたのだが、ある日突然、私自身が小さな蟻に「変身」していたのに気がついたのである。これは私がじつと冷たい目で、情けない「自分の姿」を直視できるようになったからかもしれない。

本来のリハビリとは、「障害を得て能力が低下した自分をまっすぐ見詰めるときから始まる」と言われるから、私はようやくリハビリのスタートラインに立てたということなのだろうか。

「リハビリである程度の行動の自由を手に入れなければ、新しい一歩が踏み出せない」と思っていた私は、実は足踏みをしていたのと同じだったのではないだろうか。

私に与えられている人生の時間はそれほど長くはないのだから、あれこれ思いわずらっている余裕はないのだ。

私は還暦を迎えようとしている。機能の回復にのみ一喜一憂せず、障害者として生きていくためには、どうすればよいかを考えることが必要なのである。私の低下した能力を高めようとしても、回復のスピードが桁違いに遅いので、残り少ない自分の人生を大事に生きるためには、生き方を考え直すことが第一なのである。手や足を動かす自由は少しずつでも確実に戻ってはいないが、大事な人生を手足の運動と機能の回復にばかり使っていていいものか、真剣に考える必要が生まれた。

竹がカーンと鳴ったら忽然と悟りを開いたという、偉い方がいらっしやっただが、私はグルグルと一つ所を堂々めぐりしている感じがする。

「いつまでもそんなことでどうするか！」

私を叱る声が富士山から聞こえてくるようだった。

甘えはなかったか

平成元年新春のある日、リハビリ仲間のリーダー格である中田庸子さんがわが家に見えて、ふっくらとした、しかしマヒしている丸い手首をよいほうの手で机の上に持ち上げながらこう言った。

「悪い手は重たいんですよね。こうやっていい手で持たなきゃならないから。でもうちの母は私に、

『庸子みつともないよ』って言ったんですよね」

「やさしいお母さんだったんだね。娘が少しでも格好よくなって欲しいと思ったんだよ。でも、お母さんだからこそ厳しい注文を娘にしたんだろうね。家内だったら、僕にはよかったよかった、としか言わんからなあ」

こんな会話を中田さんと交わしてから後、少しずつ、この話の深い意味が心の奥深くしみ込んでいった。それは、「人間はひとりよがりて甘えていたらだめだよ。努力しているというだけじゃなくて、どこから見ても社会人として立派に通用するように行動しなさい」中田さんのお母さんがかわいい娘に望んだことは、たぶん、こんなことだったのではないかと思えてきたのである。

母親が娘に求めることも、妻は夫には求められないのかもしれない。「僕がだめと言っているのに、これ以上できるかーっ」リハビリの初期に、拘縮した腕を伸ばす痛さに耐えかねて、家内を怒鳴ったこともあった。

毎日の歩行訓練は、私に考える時間と機会とを与えてくれる。

私は歩きながらひとり静かに考える。障害を持つ仲間とつくっている泉睦会の中には、大勢の障害者が参加している。しかし、その仲間の中でも私は、どちらかという元気だし、手や足や発音もよいほうだから、会の運営にもたずさわっているが、ついついそんな自分に満足して、自分よりも手や足の具合が悪い会員と比べ、自分のリハビリの成果に自己満足している愚かな私が見えてき

た。こうした幼稚な段階から一日も早くぬけ出し、一般の社会人としても十分に通用するようにしなければならぬ。

「私も努力すれば、少しでも社会に貢献できる」とならねばならないのだ。ようやく回復した一部の能力を使っても、「自分に何ができるか」を厳しく問う姿勢が求められねばならない。

「よしよし」という同情から、「そんな格好でどうやって働くつもりか」という叱責に変わることが大それたのではないか。自分自身を甘やかさず、身に受けた障害に対してどこまで反発できるか。今の私に何ができるかを日夜考える。

こんなことを考えた背景には、後で触れるが、中田さんを通してお手伝いした障害者の会誌『あゆみ50号』の仕事を通じて、自分にも役に立つ仕事ができると知ったこと、手記に込められた皆さんの生命力に、私の弱気な心が揺すぶられたのに加えて、中田さんのお母さんが娘を励ました言葉の中に真実を感じたからだと思う。

リハビリの訓練で、手足の力をつけながら自分にできる仕事を探したい。でも私に何ができるだろうか。長い人生でこれまでに蓄えてきた知識や経験の中から、社会にお返しする資産が見つかることを期待しよう。でもまだ、それが何なのか、どうすればいいのか、方法も十分にわからない。でも今にチャンスが来ると思うので、心の支度をして待つことにする。笑われてもよいが「障害者の仕事だから」という逃げと甘えの姿勢は捨てて、これからは自分には厳しく当たっていい。

#### 私の青春賛歌

平成元年の年末は、退院して四回目のクリスマスと、還暦を祝うことができ喜びもひとしおであった。『正法眼蔵』の勉強で新しく親しくなった方からいただいたクリスマスカードに、ウルマンの『青春とは』の一節が書き込まれていて、目をみはってしまった。私が好きだったこの詩は眠っていた「昔の私」に火をつけてくれたのである。

青春とは……心の持ち方を言う。

たくましい意志、すばらしい想像力、生き生きとした情熱を指す。

青春とは引っ込み思案を追い払う勇氣、安楽さをふり切る冒険心を意味する。

年を重ねただけで人は老いない。理想を投げ捨てたとき初めて老いる。

多くの人々から神仏から、美しさ、希望、喜び、勇氣、そして力の靈感を受ける限り君は若い。

こうべを高く上げ希望の波をとらえる限り、八十歳であろうと君は若さのうちに止む。

ウルマンのこのメッセージは、私が忘れていた「理想を見詰める心」を思い出させてくれた。私はワープロに向かい、心に浮かび上がってくる言葉を使いながら、詩だか散文だかわからないものを書いていった。それは私自身を勇気づけ、マヒの仲間に声援を送るために、ウルマンの詩を踏み台にして仕上げたものである。マヒに悩む私自身が精気を失わないよう、また友人が一人でも二人でもこれを

読んで元気になるようにという、そんなささやかな願いからだった。

片マヒと闘う友に

私たちの人生で大事なものは 心の持ち方なのです  
長い道歩く強い足や 重たい荷物を持つ手だけが 大事じゃない  
人間として大事なものは 固い意志 豊かな想像力 生き生きした感情  
そして生命の根源からあふれだす「意欲」 それがいちばん大事なのです

障害を持つ私たちは 安易さの誘惑に 打ち勝つ勇気が必要になります  
人は 肉体に障害を受けただけで 不幸にはなりません  
肉体の不自由さだけで 幸福は失われません  
肉体が健全でも 希望を投げ捨てた人は 不幸なのです  
肉体が不自由でも 希望に燃えている人は幸福なのです

障害は私に苦痛を与えましたが 幸福を願う希望までは 奪えませんでした  
家族とふれあい 友とつきあい 人に喜びを与えるほうが  
人から受けとるよりも 大きくて楽しいことを知っているのです

詩人が 「人はだれでも 大自然から教えを受ける」とうたいました  
朝の光 風にゆらぐ木の葉 夕焼け空の一番星 野に咲く花 こんなものから  
あなたが 明日への希望 信頼の喜び 思い切った挑戦の勇気を  
教えられる限り あなたは いつも幸福なのです

再発はこわいから 何もしたくない 手を動かすと痛いから動かさない  
生きていてもしょうがない などと思いつくと  
希望も消えさり この大自然からの通信は もはやあなたの手が届きません

やがて あなたの心の真ん中に深く絶望が芽ばえ  
「何をしてもだめだ」

と投げやり 自暴自棄の思いが占め 生きようとする力は なくなつてゆきます  
そのときこそ あなたは人間として 終わりを告げねばなりません  
障害があつても 人生の最後の朝まで 希望を持ち続ける そんなあなたとともに  
私も明日に希望を持ち続ける仲間でありたいと 願うのです

### 私の世界が変わる

私は、青春の詩から新しい刺激を受けて、少しずつ目が開かれていった。

昔の私は、単なる知識としてしか、いろいろな本を読んでいなかったことを痛感した。それは、だれが何を主張し、いつだれが何をしたか、というに過ぎないものであった。こんな知識がどれほど蓄えられても、私がこんど体験したような大きな病気の前には、あまりにも無力であった。痛みとともに体得して、私の血肉になっていったものだけが私を助け、力づけてくれたのである。

障害者となったために、多忙な社会生活から退いてリハビリの訓練に打ち込む毎日の生活は、すべてを新しい目で見ることを教えてくれた。私を取り巻く世界を改めて見直しながら、その中でどんな生き方をすればいいのか、黙って一步一步と歩きながら、私の模索の日々が続いた。そして、生死の問題を考えるうちに、なにげない「人生の一大事」という言葉に出会ったのである。

こんな言葉を真剣に考えずに過ごした私の半生を、恥ずかしい思いでふり返った。そこでは元気な私が、すばらしい人類の遺産に囲まれながら、そのことすら自覚せずに、目の前にちらつく幻影だけを追いかけて人生を過ごしたのではなかったか、と思うに至った。

人にはそれぞれ時代が要求するさまざまな仕事を与えられ、それに応じた生き方がある。私が人生の大半を過ごした世界では、厳しい国際競争、合理性と高い品質の要求、そして、効率という言葉がポイントになっていた。ここでは、人々の欲望を満たす活動が、社会発展の原動力にすらなっていた

のである。

しかし、今の私は自分の体質改善という、生死にかかわる条件を満たすために、日々の食事や欲望を制御することの大事さを、身にしみて学んでいる。足で歩いたり走ったりし、手で物を持ったり、しゃべったり歌ったりする、人間としての基本的な能力が失われているので、これを回復することが私の大きな希望であった。

失われた社会的な地位は、私が死んだときに新聞が報道してくれるかどうかということに過ぎず、人間としての生き方自体の本質にかかわることではないと思う。私の今の生活は、物質的な欲望が小さくなっているので、その小さな欲望を満たすことは比較的楽であり、健康な時代にはとても考えられない満足感を得ているのである。

そんなとき、実際の生活で、すばらしいお手本を示してください先達の方々が私の近くにおいてになるのに気がついた。

私が『正法眼蔵』の講義を受けている禅宗の泰斗、古田紹欽先生は喜寿の祝いをすまされてから、不便な中国の奥地に数回もお渡りになった。禅という偉大な文化がどのようにして中国大陸の中で継承されていったかを、考証しながら実地に歩いて調べるためである。ときには天安門広場の騒乱に危うく巻き込まれるという危険までおかしながら仏教遺跡を訪ねられた。

通常は早朝に起床され、畑を耕して野菜を作り、遊びに来る小鳥と話し、数々の幅広い分野の原稿を書いた上に、私たちには情熱的に『正法眼蔵』を講義してください。その姿には、年齢を感じさせな

いどころか、はつらつとした若さがあふれているではないか。

しかも、この講義を聞いておられる方の中には、すでに傘寿を迎えられながらも、なお旺盛な研究心で道元と真剣に取り組んでおられる、「若々しい先輩」がいらっしやった。

私が病気をしなければ、相変わらず物質的な欲望に取り巻かれた世界に生きて、満たされることのない渴きに悩まされていたことだろうと思う。病気をして、さまざま欲望を捨てることを余儀なくされた私は、それに代わって、こんなすばらしい一途な生き方があることを見せていただけたのだと思う。

こうした、欲望と関係のない世界にこそ、障害を得たお前の生きる道があるのだと、神仏が私に示してくださったに違いない。神仏に感謝するのみである。ここに至って、客観的には障害者ではあるが、積極的な人生を全うしようとする、物質的な欲望が少なくなった新しい森山志郎が生まれようとしていた。

こんなすばらしい世界があることを知って、私の心が広く大きく広がっていくのを自分で感じたのである。

### そのとき妻は

私の幼い日の思い出の中に、般若心経を唱える祖母の膝の上で、小豆を一つずつ右の箱から左の箱に移していた記憶があります。

祖母は、戦地へ赴いていた父の無事を祈っていたことだったのでしよう。

子供たちが受験戦争の渦中にあつたころ、夫も多忙で、海外の出張も多く、留守勝ちでした。私はなぜかこのお経を書いて、ひとり家内安全を祈りました。特に仏教の勉強をしたわけではありませんでしたが、写経をしていると、不思議に心が安まったことが忘れられません。

こんど夫が倒れて、無為に日を送るようになった日、やはり何かに引かれるように、私は『正法眼蔵』の講義を聞くことを勧めていました。『正法眼蔵』とは、曹洞宗の開祖道元禅師が弟子のお坊様方に仏教を説いた書物ですが、なかなか難解な書だということです。かつて、会社の仕事の上で苦しい立場にあつたころ、夫が一度は読んでみたいと申したのを思い出したからです。

夫はまだ左手で字がやっと書けるくらいのころ(昭和六十二年の一月)でしたから、送り迎えに私もいっしょにまいり、夫の受講中は買い物をしたり、銀行の用事をすませたり、ときには手紙を書いたりして過ごしました。当時、夫と離れての自由な時間が私にはほとんどなかったのです。

夫は私にもいっしょに講義を聞くようにと誘いますが、本を開いても少しもわからず、ただ、頭が痛いだけ、受講なさっていらっしゃる方も男性が多くて、それぞれ立派な方々ばかり、とても入れていただけるとは思いませんでした。

そのうち期末になって、先生と会食があるので夫は出席したいと申しますが、夫はまだじょうずに左手でお箸が使えませんでした。

「何か粗相があつては困るからついてきて欲しい」と申します。ひとりで行けばいいのと思いましたが、皆さまにご迷惑がかかつてはと思ひ、半ば緊張しながら付き添って出席しました。ところが先生はじめ皆さまからも特別扱いされることなく、自然に私も仲間に入れてくださったので、「ああよかった」と胸をなで下ろしました。

やがて長女も結婚し、新しい人生を歩むようになり、ほっとした六十三年の暮れ、講義二百回のお祝いの会食があり、またもや私も出席することになりました。

そのとき、私には理解しにくいかもしれないけれど、この講義を聞いてみようと心にきめました。

夫がいっしょに聞こうと誘わなかったら、そして再び、来てくれと言われなかったら、私はまだあのまま何も考えずに、自分を見詰めることもしないで不満を並べながら人生を歩いていたかもしれません。

難解な内容ですが、どなたかが「一つの風景を見るつもりで出席している」とおっしゃったことも親しみ深く、お陰さまで今は温かく包み込まれるような、なごやかさの中で道元の教えを聞ける幸せを感じています。

また先生はじめ、受講なさっていらっしゃる方々は、お年を感じさせない若さで、生き生きと「青春の日々」さながらの毎日を送っていらつしやいます。すばらしい人生のお手本を見せていただいている感じがします。

夫が元気で働いているころは、「亭主達者で留守がいい」ではありませんが、夫は夫、私は私の生活、というのがあたりまえと思っていました。札幌に赴任してからは、それでも多少、二人で出かける機会もふえましたが、それも忙しい仕事の合間を見つけてのこと。

夫といっしょに仏教のお勉強をする日が来るなどとは思ってもないことでした。元気なころから、こうしたゆとりのある暮らしができたなら、もっとよろしかったでしょうが。

いま元気で、がむしゃらに働いているご主人をお持ちの奥さま方に、「ど

んなにご主人が忙しいとおっしゃっても、ゆとりを持つように、おっしゃって下さい」と、私は申し上げたい気持ちでいっぱいです。

私どもは、病気をして初めて、ではありませんが、それでも、ともに同じ道を行くことができる幸せは、何ものにもかえがたい貴重なものと思っています。

主人はこの日を楽しみに、いつもの苦しさを忘れたように出かけますので、私もうれしくなります。いつまでも皆さまがお元気で、この講義も長く続きますように心から願っております。



九州の実家を妻と訪れる。故郷へ元気で戻れるとは……

戻る